

# 聖路加看護学会

## ニュースレター

第14回聖路加看護学会学術大会開催にあたって 第14回聖路加看護学会学術大会のご案内(第2報)  
平成20年度聖路加看護学会学術交流会 Lobby お知らせ 編集後記

### ●第14回聖路加看護学会学術大会開催にあたって

第14回学術大会会長 堀内 成子(聖路加看護大学)

第14回学術大会のご案内をいたします。

今回の学術大会のテーマは、「ファーストクラスをめざす道—ケアの未来を拓く—」としました。聖路加の創設者であるトイスラー博士と同時代に生きた清里の父ポール・ラッシュ博士の次の言葉は、多くの若者を魅了します。

Do your best, and it must be first class.

(最善を尽くせ、しかも一流であれ)

この道につづく職業人になるようプログラムを企画しました。実践・教育・研究分野で活躍なさっている演者からの講義と質問という形式をとりいれます。実践では〈熟練者による技の伝承〉、教育では〈省察的实践をめざす成人教育〉、研究では〈解釈的現象学〉、また〈概念分析からプログラム開発へ〉、の Review Lecture(系統的な講義)を予定しています。

お昼は、ランチョンセミナーでお腹と頭脳を満たす時間にと考えています。

一般演題の発表形式は、ポスターによる発表を予定しています。また留学生を交えての“英語で発表・討論しよう”というセッションも企画中です。

夕方からは講演者を囲んだ懇親会や CNS・認定看護師・看護管理ファーストレベル同窓会を開催できればと考えております。

秋の気配がする土曜日、普段の仕事を離れて第一級の講師陣の講義を受けて、同じ関心を持つ仲間と机を並べて勉強してみませんか。

9月の5連休の次の土曜日に皆さんとお会いできることを楽しみにしております。

### ●第14回聖路加看護学会学術大会のご案内(第2報)

メインテーマ:「ファーストクラスをめざす道  
—ケアの未来を拓く—」

大会長:堀内 成子(聖路加看護大学)

日時:2009年9月26日(土)9:30~19:30  
(9:00~9:30は総会)

会場:聖路加看護大学 東京都中央区明石町10-1

#### 〈プログラム〉

##### ◆大会長挨拶

##### ◆Review Lecture(教育講演)

看護研究の方法論としての解釈的現象学

相良ローゼマイヤー みはる氏

概念分析からプログラム開発—意思決定を支える—

辻 恵子氏

おとなの学びを創る—省察的成人教育—

三輪 健二氏

プロフェッショナルの技:誕生を支える技

毛利 種子氏

地域で最期まで生き続けることを支える技

川越 博美氏

##### ◆一般演題 示説発表(日本語・英語)

##### ◆ランチョンセミナー

㈱医学書院:MaInを使ってあなたもファーストクラスの

管理者になろう!

井部 俊子氏

グリーンフラスコ研究所:植物療法の基礎と応用

~看護領域での活用の可能性

村上 志緒氏

ジョンソン・エンド・ジョンソン㈱:(仮)おっばいから

赤ちゃんの宇宙は始まる

橋本 武夫氏

その他交渉中

##### ◆フォーラム

毛利種子先生 川越博美先生を囲む会

大学院生・CNS・看護管理者ファーストレベル・認定看護師同窓生の集い

〈演題申し込みおよび抄録原稿締切日〉

2009年6月1日(月)必着

##### 〈参加費〉

学会員

5,000円(当日参加 6,000円)

非学会員

6,000円(当日参加 7,000円)

大学院生

2,500円(当日参加 2,500円)

学部生

無料

※事前申し込み期限:2009年9月4日(金)

##### 〈問い合わせ先〉

学術大会事務局:〒104-0044 東京都中央区明石町10-1

聖路加看護大学 5F 26研究室

第14回聖路加看護学会学術大会事務局

FAX:03-5550-2265

e-mail:slnr14@slcn.ac.jp

ホームページ:http://slnr14.umin.jp/

※詳細は、同封の「第14回聖路加看護学会が学術大会のご案内」をご覧ください。

# 平成20年聖路加看護学会学術交流会主催パネルディスカッション

第12回聖路加看護学会学術交流会は平成20年9月27日（土）、本年度学術大会終了後、聖路加看護大学301号教室で開催いたしました。『看護の目から見直そう医療の中の衣食住－医療づけにしないためのケアのあり方－』というテーマで、入院生活を送る患者のQOLの維持・向上に関する看護について見つめ、ディスカッションするために各分野で活躍している3名のパネリストをお招きしました。当日は約30名の参加があり、看護ケアのあり方を再考する有意義な交流会となりました。また、本年度から認定看護師の更新申請などに活用できるよう本会の参加証を発行することとしました。

ここに当日の概要をご紹介します。

## 〈看護の目から見直そう医療の中の衣食住－医療づけにしないためのケアのあり方〉

### I【衣】パジャマは本当に必要か。メリハリのある入院生活をめざして

西野 理英（聖路加国際病院

5階東病棟ナースマネージャー）

整形外科患者が入院する病棟の管理者である西野さんは、日野原重明先生の「入院中は本当にパジャマで過ごすべきか」という問いかけをきっかけに、病棟のスタッフと共に調査研究を行った。調査研究の目的は、入院患者が日中寝衣以外で過ごすことによって身体・精神機能にどのような影響を与え、それがセルフケア能力の向上に効果があるかどうかを明らかにすることで、7人の入院患者を対象に寝衣以外の服装で日中過ごしてもらい、その後アンケートを行い、以下のような結果を得たことが報告された。

全体的には患者は日中着替えることで活動に意欲がもて、昼間に睡眠をとることは必ず生活のリズムをもととする活動性の変化が見られたという結果が得られ、それ以外にも肯定的な意見が多く、西野さんは寝衣以外で過ごすことが患者の気持ちを積極的にリハビリへ取り組むことへの効果が得られたと話された。また、膝の手術をした若い患者が寝衣でなく短パンを着用したことで創部のケアにも役立ったなど、ケア面でも効果的であったこと、それ以外にも「夜になりパジャマに着替えると“夜を迎えた”というメリハリがでてよかった」「パジャマのよさ・部屋着のよさがあることを感じた」「病院内でもパジャマで行くと気後れする場所もあるので、その点部屋着だとスムーズに行動できた」など患者の意見が紹介された。

最後に疾患後の障害にあわせた部屋着の工夫に家族が協力してくれたというエピソードが報告され、入院中も寝衣だけで過ごすのではなく、患者の生活にあった工夫をしていくことがセルフケア能力を高めるために必要であり、看護師が患者・家族とともにその前向きな意欲を持つことが大切である西野さんは話を締めくくった。

### II【食】口から食べるための工夫

桑田美代子（医療法人社団慶成会 青梅慶友病院

看護介護開発室長／老人看護専門看護師）

桑田さんの報告は、病院で実際に提供されている献立や食の楽しみを広げるために開催されたイベント、食事介助の工夫やそれを行なうスタッフの様子など患者の【食】を支える様々な活動をたくさん写真を見せてくれた。

桑田さんの勤める青梅慶友病院は700余の病床のうち、7割が療養・認知型病床で、入院患者の平均年齢は87.8歳、90歳以上の患者が全体の3分の1以上、認知症患者は80%とまさに高齢社会のニーズを果たすべき病院であり、桑田さんご本人もその中で老人看護専門看護師としての役割を果たすことを信念としていることがひしひしと感じられた。そして病院でのサービスは生活の上に介護が、そして介護の上に医療があり、その全てを網羅しているのが看護職であり、ケアの責任者は病棟師長にあると看護の役割の重要性を述べた。

高齢者に対しては様々な生活援助や工夫がされているそうだが、特に食生活に関しては「見て楽しみ、噛んで楽しみ、香りで楽しむ」

といった考えを中心に患者の五感をつかって、食事を美味しく楽しむものにしたいと説明された。

また、それ以外にも様々な斬新な活動がなされており、例えば食事介助のみを行なう短時間パートの職員を活用したり、食事は病棟で調理するといったサービスを実施したり、水分が飛んでしまって乾燥しやすく食べにくい刻み食は出さないなど、目から鱗が落ちるような活動が紹介された。また、口から食べる楽しみを持ち続けてもらうために経管栄養や胃ろうは使わない方針を家族や言語聴覚士と十分話し合い、経口摂取に積極的に取り組んでいる様子が聞かれた。誤嚥は高齢者なら当然のリスクとして受け止め、口から食べる喜びを感じてもらいたいと職員・家族とが試行錯誤しながらも一丸になっている様子が感じられた。

もちろん看護の技術の向上は不可欠で、まずは看護師も患者と同じ体験をするのだそうである。ベッドに横になり、頭部挙上し他の看護師に食事介助をしてもらう。そこでスプーンの大きさはどのくらいがいいのか、口のどの方向から入れれば食べやすいのかなど、患者と同じ体験が次の看護を導くのだという。

最後に私たちは毎日おいしく食べられることを普通としているが、「高齢者にとってはこの食事が最後の食事になるかもしれない」と話された桑田さんに会場の参加者も新たな意欲をかきたてられていたようであった。

### III【住】一日をつくる生活環境 モーニングケア

大橋久美子（聖路加看護大学大学院 博士後期課程）

大橋さんは現在、「モーニングケア」をテーマに大学院で研究を続けており、今回は彼女の取り組んでいる研究から得られた「入院生活」そして「モーニングケア」の概念を中心に医療の中の【住】について説明していただいた。

大橋さんはまず、様々な文献から一般病棟における「入院生活」という概念の特徴を明らかにし、それが入院患者への生活援助において有用な活用につなげられないかと研究を始めたそうである。結果、入院生活とは療養生活を中心とした日常生活であり、そこにあるストレスや緊張といった「ネガティブな性質」から「変化・変動」が生じさらに「適応・構築」と循環するという。そして生活の安定性を高める「適応・再構築」の援助とは生活のリズム調整であると考えた。次に一日の始まりでもある朝の構造を明らかにするために、床上安静患者の朝の生活場面を参加観察し分析した結果、一日の始まりを創り出すケアが重要であることにたどりついた。

朝気持ちよく目覚め、一日の生活にのぞむには？一日の生活への関心や意欲を持てるような介助を行なうには？これらの疑問から次に「モーニングケア」の概念を深めることになったが現在「モーニングケア」はその定義や認識・意味が不明確で、各現場でもその概念は曖昧になっており、それが明らかにしなければよりよい一日のスタートを確立することは難しいという考えにいたり現在も研究を続けている。

最後に大橋さんは患者の全体像を把握し、その生活の質を考える



シンポジストの3人

上で看護の役割は重要であり、医療づけにならないためには、やはり看護の基礎教育の中で生活援助における看護の視点を育むことの大切さを述べた。

#### 4 会場とのディスカッション

参加者との間に繰り広げられた熱いディスカッションの一部を紹介します。

**会場参加者：**パネリストの皆さんから看護学生に伝えてほしいことは？

**桑田：**現在、食事介助という行為は看護ケアから遠くなっていて、学生も看護師も実践しないことが多い。人の食事の介助、特に物言わぬ人の介助をすることの難しさを知ることそしてそのための感性を是非養ってほしい。日本の文化を察しての日常生活を介助する、教員の皆さんにはそのための種を基礎教育の段階で学生に蒔いてほしい。そして、芽は現場で出させます。

**中村（司会）：**日常生活に密接な援助への教育や実践が薄らいでいるということなのでしょうか。

**大橋：**まず、何をやっていいのかわからない、創造できない。そのことを単純に教えるのではなく、イメージすること、考えること、そして工夫することを学んでもらえればと思う。

**西野：**そう、例えば当院は全ての病床が個室で各部屋に洗面用のシンクがあるが、そこに手が届かない患者への配慮ができないように思う。救急入院した患者が「ベッドからはなれてシンクで手を洗いたい」と思っているなどということは考えもつかないのが現状のようです。

**会場参加者：**在宅でも入院生活で変わってしまった生活習慣を変えられない人もいます。在宅に帰ってもパジャマのままで過ごしている。病院での生活に慣れていてパジャマを着ていなくてとは決め付けている人も多い。

**会場参加者：**遷延性意識障害の患者を多く持つ病院は、午前3時からモーニングケアをしないと仕事が終わらないのが現状。でも、自分自身が患者だったらどう感じるか、とうい意識をもつことが必要で、それがなければ人間、日本人らしさがなくなってしまふ。



熱心にきく聴衆



会場からの質問をうけるシンポジストと中村めぐみ委員長

人間らしさを大事にしたい、という状況を作り出していかなくてはと今日は感じた。

**桑田：**「死」を重く考えてほしい。惨めな格好でいいなんて人はいない。自分だったらどうありたいかを考えてほしい。

**大橋：**生活から看護を考えることを再考してほしい。今やっていることを見つめなおすことで次が生まれる。新しいことをするのは大変だが、私は今やっていることを効率的にするための研究が大切と再考している。また、現場と協力して研究をしなければと感じる。

**西野：**日常生活への援助が多くなる慢性期の患者が集まる部署から急性期病棟への移動を希望する看護師も多いが、看護の原点をきちんと見つめるようこれからも若いスタッフと一緒にがんばりたい。病院にいるからその人らしくいられないなどということ避けたい。

**桑田：**高齢者が増えているからこそ、日常生活が重要。看護の真髄が発揮できるはず。ミニドクターとしてではなく、看護師の役割機能を実施できるはず。

#### 5 おわりに

今回のテーマ、「看護の目で医療の中の衣食住を見直す」ことは「患者の尊厳を守る」ことだとパネルディスカッション参加者間で確認された。また、実際がらばっている看護師がお互いにエールを送り、様々な看護の側面から日常生活を見つめ、お互いに刺激しあい一緒にがんばっていきましょうとまとまった。西野さん、桑田さん、大橋さんそして参加者の皆さん、本当にありがとうございました。

(文責 学術交流委員会)

#### 聖路加看護学会：理事・監事・評議員 平成21年度 役員一覧

理事長：山田 雅子（聖路加看護大学）

理事：井部 俊子（聖路加看護大学）

大久保功子（東京医科歯科大学大学院）

太田喜久子（慶應義塾大学看護医療学部）

佐居 由美（聖路加看護大学）

高木 廣文（東邦大学医学部看護学科）

鶴田 恵子（日本赤十字看護大学）

中山 洋子（福島県立医科大学看護学部）

森 明子（聖路加看護大学）

監事：菊池登喜子（元日本看護協会）

近藤 潤子（天使大学）

評議員：青木 康子（帝京大学医療技術学部看護学科）

秋元 典子（岡山大学大学院保健学研究科）

麻原きよみ（聖路加看護大学）

井部 俊子（聖路加看護大学）

宇佐美しおり（熊本大学医学部保健学科）

大久保功子（東京医科歯科大学大学院）

太田喜久子（慶應義塾大学看護医療学部）

押川真喜子（聖路加国際病院）

小野 正子（西南女学院大学保健福祉学部看護学科）

菅間 真美（聖路加看護大学）

菊地登喜子（元日本看護協会）

粟生田友子（新潟県立看護大学看護学部）

黒田 裕子（北里大学看護学部）

小松 浩子（聖路加看護大学）

近藤 潤子（天使大学）

近藤 好枝（慶應義塾大学看護医療学部）

佐居 由美（聖路加看護大学）

新道 幸恵（日本赤十字広島看護大学）

鈴木 久美（兵庫医療大学）

高木 廣文（東邦大学医学部看護学科）

高屋 尚子（聖路加国際病院）

鶴田 恵子（日本赤十字看護大学）

中山 洋子（福島県立医科大学看護学部）

野並 葉子（兵庫県立看護大学）

菱沼 典子（聖路加看護大学）

平野かよ子（東北大学大学院）

舟島なをみ（千葉大学看護学部）

森 明子（聖路加看護大学）

森田 夏実（慶應義塾大学看護医療学部）

山田 雅子（聖路加看護大学）

山本あい子（兵庫県立大学看護学部）

リボウィッツよし子（青森県立保健大学）

ポール・ラッシュ博士は、日米の民間交流の架け橋として多くの軌跡を残しております。中でも聖路加国際病院建設の募金活動は、博士自身にも大きな影響を与えました。聖路加国際病院の創設者トイスラー博士から聞いた言葉、それが「最善を尽くせ、しかも一流であれ」だったのです。トイスラー博士はポールに、「もしキリストの名のもとに何かしようと思ったら、人々が目標としてまねのできる本物を示せ。しかもそれは一流のものでなければならない」と教えました。ポールはこの教えを忠実に守ったのです。

本学会の名称は、聖路加を学会の冠に置いています。そしてポール・ラッシュの生涯の指針をテーマとした本学術大会では、一流の講師陣による系統的な講演を予定しております。講演に先立ち、講演者が一流たる所以を紐解く場合、またはポール・ラッシュの足跡や思いをより知りたい方は、以下の書籍が皆さまを第一級の世界へと誘うでしょう。

(堀内成子)

1. 解釈的現象学について

◆ Benner P. ed. (1994). ベナー 解釈的現象学 健康と病気における身体性・ケアリング・倫理. 相良ローゼマ イヤー みはる監訳 (2006). 医歯薬出版株式会社.

2. 概念分析について

◆ 田代順子 (2002). 経験を概念化する方法を使って看護現象に迫ろう! 第1回 看護現象の概念化と概念分析とは. Nursing today, 17(4), 52-55.

3. 省察的成人教育について

◆ Cranton P. A. (1992). おとなの学びを拓く—自己決定と意識変容をめざして. 入江直子・豊田千代子・三輪建二 訳 (2006). 鳳書房.

◆ Cranton P. A. (1996). おとなの学びを創る—専門職の省察的実践をめざして. 入江直子・三輪建二監訳 (2008). 鳳書房.

4. プロフェッショナルの技について

◆ 毛利 多恵子・毛利 種子 (2008). 【インタビュー】産む環境と助産婦の存在の意味—臨床経験から見えてくるもの. 助産雑誌, 62(10), 910-917.

◆ 川越 博美共著 (2005). 家で看取るといふこと. 講談社.

5. ポール・ラッシュ博士について

◆ 山梨日々新聞社編 (1993). 清里の父、ポール・ラッシュ伝. パース出版.

お知らせ

★学術交流委員会

今年度の学術交流会の詳細につきましては決まり次第、学会ホームページに掲載いたしますのでご覧ください。

(担当理事：中山洋子、鶴田恵子)

★学会誌編集委員会

2009年度より編集委員が交代いたしました。今後ともよろしくお願いたします。

学会誌は2008年度より3号(大会号を含む)発行しています。2009年1月、7月、9月(大会号)の予定でしたが、第1号の発刊が遅れ、皆様にはご迷惑をおかけしました。3月には皆様のお手元にお届けできる予定です。なお、現在は第2号の発行に向けて作業を進めております。2010年度1号の締め切りは2009年8月の予定です。ますますの投稿ならびに編集へのご協力をお願い致します。

(担当理事：太田)

★庶務

聖路加看護学会は、看護学の発展に貢献し、質の高い看護を提供したいと願う看護学探求者の学術交流の場を提供しています。学部卒業生や大学院修士の方々をはじめ、実践、管理、教育・研究等さまざまな分野で活躍する皆様の実践・研究の成果を発表し、意見や情報を交換する場としてご利用ください。本学会では、聖路加看護大学の卒

業生・修士生のみならず、広く看護学の探求を目指す皆様のご入会を心より歓迎いたします。ぜひ、周りの方々にご入会をお勧めください。3～4月は移動の時期です、自宅・勤務先の住所変更の際には、E-mail (slnr@slcn.ac.jp) または、FAX (03-5565-1626) で学会事務局までお知らせ下さい。学会ホームページ (<http://slnr.umin.jp/>) も、是非、ご利用ください。(担当理事：森明子、佐居由美)

★会 計

本学会は10月から9月の年度単位で運営されております。このたび諸般の事情により、該年度の学会費の納期を6月末日とさせていただきます。2009年から6月末日までに学会費の納入が事務局で確認できない場合、学会誌の発送を見送らせていただくことがあります。

納入状況については、同封いたしました領収書ならびに請求書をご参照ください。なお、お問い合わせはメールもしくはファックスで大久保までお願いいたします。

振込み先：郵便振替口座 00100-8-670371

加入者名 聖路加看護学会

E-mail：タイトルに「聖路加看護学会会費納入状況問い合わせ(氏名)」と記して送信していただくと幸いです。

Fax：03-5803-0154 (大久保) までお願いいたします。

(担当理事：大久保功子)

編集後記

新委員会での最初のニュースレターをお届けします。花冷えする季節ですが、新たな躍進の時期でもある新学期がまた始まりますね。

(高木)